研究発表

熊野比丘尼の絵解き
—「地獄語りの文芸」試論—

The Explanation by a Pictures of the Kumano *Bikuni*
—an essay on hell tale literature—

林　雅彦*

The Kumano *bikuni* (Buddhist priestesses), by virtue of their offices, were called *kanjin bikuni* (the religious educator *bikuni*); they were also known as *etoki bikuni* (the explainer with pictures *bikuni*) or *uta bikuni* (the singer *bikuni*). Originally, it seems that after making the pilgrimage to the shrines at Kumano and Ise, they travelled around Japan selling the Kumano amulets called *Okarasusan* ("the holy crows") after the pattern of crows printed on them and other charms as well as working to teach and spread the Kumano faith through telling stories, teaching with pictures, and singing while keeping time with a kind of instrument, the *sasara*.

As can be seen in the existence of such expressions as *ari no Kumano-mairi* for throngs of people like ants and *ari no towatari* for people going along a narrow path like ants, the Kumano faith ranked high among the folk religions of

* Hayashi Masahiko 〔現職〕 明治大学助教授

the middle ages. And yet practically no materials from the time remain today concerning the educational activities of the Kumano *bikuni* or of their particular speciality of teaching by using pictures of heaven and hell. However, through the use of modern documents and paintings, we can form some picture of the activities of the Kumano *bikuni* in the middle ages and early modern ages, even if it must necessarily remain an indistinct and fuzzy one.

The teaching through pictures (*etoki*) of the Kumano *bikuni* used heaven and hell pictures centering on hell pictures relating to women such as the lake of blood hell and the barren woman hell. There are some differences in content, but in addition to the hell pictures already present in the Nara period, stories with the theme of hell were also frequent, as you undoubtedly know, in such genres as *setsuwa bungaku* (narrative, legendary literature) and *otogi zoshi* (books of stories for women and children). A form of popular entertainment (*sekkyobushi*) graphically teaching about the Sai riverbed in hell also seems to have existed. In this paper, I want to consider the teaching with pictures (*etoki*) of the Kumano *bikuni* from the viewpoint of the hell tale literature.

1

「絵解き」とは、大別して，時間的な展開を持つ（ストーリーのある）絵

画，即ち説話画を解説（又は説明）する文学・芸能を指す場合と，右の説話画を解説する人物そのものを意味する場合とがある。

ところで，かつて放浪芸もしくは大道芸的要素を有する伝道絵解きのひとりとして、熊野比丘尼が存在した。「蟻の熊野詣」とか「蟻のとわたり」といった成語が生まれたように，中世の民間信仰における熊野信仰の占める割合は高かったが，その信仰普及に努めたのが、熊野山伏とこの熊野比丘尼だったのである。中世のいつの頃からか，彼女たちは，熊野及び伊勢に詣でた後、諸国を巡って、あるいは特定の地域で,「おからすさん」と呼ばれる熊野牛玉や護符の類を売り，それにともなって物語や絵解きをしたり、簫を伴奏楽器に歌を歌ったりして、熊野信仰の教化・流布に寄与したらしい。

熊野比丘尼は、その職掌上から、勧進比丘尼あるいは絵解き比丘尼と呼ばれ、後には歌比丘尼とも称されるようになった。こうした状況にありながら，得意とした地獄絵（地獄極楽図・六道絵・十界図とも称す）の絵解き活動を記した中世資料は今日ほとんど存在しないのである。しかしながら，近世の文献・画証の両資料によって，おぼろげではあるが、中世末期及至近世初期の熊野比丘尼の芸態を推し量ることも可能である。以下、お手許の資料にそって熊野比丘尼の絵解きの芸態及び内容についてふれてみたい。

2

地獄廻りの話を考える時、忘れてならないのは、盂蘭盆会の起源とされる目蓮尊者救母譚である。印度で生まれた本話は、中国（唐代成立の『目連救母変文』がある）から日本に渡来し、漸次日本文学の中に根付いていった。説話自体も変容しながら、説話文学や御伽草子、あるいは説経節等の口承文芸と関わりを持つジャンルにも登場する。『看聞御記』永享10年（1438）6月10日条によれば、嘉応3年（1171）6月には、『目連尊者絵』と呼ばれる絵巻物が作られたという。勿論、目連救母譚は、絵解きの世界にも取り込まれたのであった。立山山麓の芦峅・岩峅両寺の御師達が全国の各の檀那場で絵解きした『立山曼荼羅』諸本中には、僧体の目連と今しも釜茹でにされようとして

いる母の姿とを描いたものが存する。例えば、各場面にごく簡略な説明語を付す佐伯省次氏本の第二幅該当図には、「目連尊者夢罪苦又ハ開山上人母」と明記されている。立山地獄の絵解きに不可欠な素材だったと考えられる。又、太宰治『思ひ出』に引かれる青森県金木町雲祥寺の『十王図』(全7幅) 中の閻魔王庁を描いた第5幅下部にも、「 目連尊者母対面　　獄釜(じごくのかま)」と傍書した同趣の図柄が見えるのである。

ところで、近世の雑俳に、

あどを打絵とき地獄を見た様に

と、地獄絵の絵解きの様相が詠まれているが、地獄を描いた現存最古の図絵は、周知の如く、奈良時代の東大寺二月堂『金銅毛彫光背』にまで遡り得る。これに次ぐものに、平安後期の『紺紙金泥一切経』見返絵がある。平安末期以降作製された「地獄絵」「六道絵」「十王図」と呼ばれる説話画は，今日各地の寺院等に伝わっている。一方、六道を図したことが、『日本霊異記』巻上・35話「知識、四恩の為に絵の仏像を作り、験有りて，奇しき表を示す縁」に記されている。文献上に「地獄絵」と明記した資料は、『日本高僧伝要文抄』巻2

「尊意贈僧正伝」の、

貞観十八年（引用者注・876年）七月十五日、生年十一、参鴨河東吉田寺見仏、後壁有地獄画、其中画絵造罪之人受苦之相、忽捨遊楽之心、即発入山之志

が最古のものである。

巨勢広高が京都東山長楽寺の壁板に地獄絵を描いたという説話が、『今昔物語集』巻31第4「絵師巨勢広高、出家還俗語」並びに『巨勢氏系図』に、その類話が『古今著聞集』巻11「巨勢広高地獄変の屏風を画く事幷びに千体不動尊を画きて供養の事」に載る。地獄絵の強烈な印象や図柄を、菅原道雅女・和泉式部・赤染衛門・弁乳母等の平安朝女流歌人が歌に詠んだのであった。又、『枕草子』『栄花物語』「さまざまのよろこび」『御堂関白記』長和4年(1015)

12月19日条、『春記』長暦3年（1039）閏12月19日条の如く、仏名会に用いられる屏風仕立の地獄絵について述べた文献は、この他にも少なくない。これらは，平安中期の人々に与えた精神的な影響の大きさを示すものであろう。時間の制約上、割愛するが、『吉記』承安3年（1173）7月9日条及び同12日条、『閑居友』巻下第8「建礼門女院御いほりにしのびの御幸の事」等によれば、院政期ともなると、（1部であるかもしれないが）地獄絵が人々の日常生活の場の傍に描かれるようになったのである。これは、六道の様相が現実そのものの中に存在したのと無関係ではないことを語っている。

3

さて、凄惨な地獄語りは、中世文学中にも少なくない。例えば、『平家物語』巻6の慈心坊冥土蘇生譚、御伽草子『大仏の縁起』『天狗の内裏』『平野よみがへりの草紙』『富士人穴草子』、説経節の『小栗判官』等が直ちに思い浮かぶ。なかでも、

なんちにおかませたる、ちこく、こくらくを、みつから、さうしにかきて、とらするなり、ひたりのわきに、をさめて、三十一のとし、いつの山にて、につほんへ、ひろうすへし、ちこく、こくらくといへとも、めにみることなしといふものに、このさうしをみすへし

（寛永9年板本、傍点引用者・以下同じ）

と末尾近くに記す『富士人穴草子』は、熊野比丘尼の地獄絵の絵解きと強い関連性が想定されるし、毒殺されて地獄に落ちた小栗が、餓鬼となって現世に蘇生し、箱車に乗せられて照手姫の手で熊野まで引いて行かれるという『小栗判官』も、熊野比丘尼の領分とつながりを有するものだと思われる。なお、近世には、山東京伝の『本朝酔菩提全伝』巻1「善悪因果序品（後談）」には、門説経の修行者による「佐比（さひ）の河原の説経節」が語られており、『石女地獄和讃』『女人往生和讃』『賽の河原地蔵和讃』等も盛行したようである。

慶安（1648～52）頃刊行された三浦為春『犬俤』の、

地獄の事も目の前にあり

うつしゑを熊野比丘尼はひろけ置て

は、連歌という制約にありながら、実に端的に熊野比丘尼の絵解きを表現し得た資料である。

浅井了意の『東海道名所記』(万治2年〈1659〉4月以後成立)は、

いつの比か比丘尼の、伊勢熊野に詣でて行をつとめしに、その弟子みな伊勢熊野に参る。この故に、熊野比丘尼と名づく。其中に聲よく哥をうたひける尼のありて、うたふて勸進しけり。その弟子また哥をうたひけり。又熊野の繪と名づけて、地獄極楽すべて六道の有様を繪に畫きて、繪ときをいたし、奥深くおはします女房達は、寺詣で談義なんども聴く事なければ、渡世を知らぬ人のために、比丘尼は許されて佛法をもすすめたりける也。

と、熊野比丘尼の謂れを述べると共に、彼女らが仏法弘通のために用いた説話画は、「地獄極楽すべて六道の有様」を描いたもの(正しくは「六道絵」と呼ぶべきもの)であり、「熊野の絵」とも呼ばれていたことなどを述べている。角川源義氏が言われるように、恐らく絵解きに際して、比丘尼たちは六道輪廻の苦行を説き、熊野の霊験を節付で語ったであろうと考えられる。しかしながら、『東海道名所記』は同時に、『名所記』の成立した万治2年頃には、既に絵解き芸は廃れ、歌念仏・流行歌を歌う所謂歌比丘尼又は売色の徒たる浮世比丘尼へと化していったことをも併記するのであった。そればかりか、30年後に成った『人倫訓蒙図彙』「哥比丘尼」(元禄3年〈1690〉刊・挿図あり)や、増穂残口『艶道通鑑』「雑之恋」(正徳5年〈1715〉序)、谷川士清『倭訓栞』(安永6年〈1777〉以降成立)も、

もとは清浄の立流にて熊野を信じて諸方に勸進しけるが、いつしか衣をりやくし、歯をみがき、頭をしさいにつゝみて小哥を便に色をうるなり。功齢歴たるをば御寮と號し、夫に山伏を持、女童の弟子あまたとりてしたつる也。都鄙に有。都は建仁寺町藥師の圖子に侍る。皆是末世の誤なり。(『人倫訓蒙図彙』)

又 朝 朗より黄昏まで所定めず惑ひ 歩行、日向臭 哥比丘尼の有様。(中略) 何時の程よりか隠し白紛に薄紅つけて、付髪・帽子に帯幅の広くなり、知らぬ貝にて思はせ風俗の空目遣い、歩姿も腰据へての六文字。「米嚙みて菅笠が歩行」と笑れしは昨日になりて、林故が笑顔が大掖の芙蓉と見へ、長春が後付が未央の柳と眺めらる。筏に乗りて川狩を嬉しがり、饅頭に飽て西瓜好する僻者共は、「さっぱりとしたるが面白し」と、

斎明にも精進堅にも及くものなしと、是を翫ぞかし。（『艶道通鑑』）

熊野比丘尼といふは紀州那智に住て山伏を夫とし諸國を修行せしがいつしか歌曲を業とし拍板をならしてうたふこをうたびくにといひ遊女と伍をなすの徒多く出來れるをすべて其歳供をうけて一山富めり此淫を賣るの比丘尼は一種にして縣御子とひとしきもをかし（『倭訓栞』）

の如く、現実に迎合した堕落の模様をそれぞれ語っているのである。

時代は前後するが、藤本箕山『色道大鏡』巻14第17「熊野比丘尼篇」（延宝6年〈1678〉序）は、廓制度と不即不離の関係にあった熊野比丘尼の生態について詳述の後、「熊野比丘尼を愛する法用」の一節で、

当道不堪の人、彼をよび入れてくつろがしむるてだてをしらねば、掛絵を所望し、血盆経を求む、是古風にて初心の至りし疋夫女子にあらずんは、奚是を望まんや

と、興味深い一文を認めている。

加藤曳尾庵の『我衣』「牛王箱」の、

牛王賣の比丘尼は元熊野牛王寶印を賣に出す、比丘尼に文庫の内へ入てもたせ、又腰に勸進ひさくをさゝせ、米を貰はせたる修行なり、寛文の頃「びんざゝら」をもたせ歌をうたはせしより風俗大に下る、尤唱歌もやひなり、此時より賣女のきざしをあらはせり、天和の頃より世上遊女はつかうするにより、かやうの族も賣女とはなりたり、然れども元來僧形なれば衣服は木綿を著したり

なる記事は、寛文頃（1661～73）もはや堕落して売女同然となったこと、それにも関らず、世間では彼女たちを出家者と見做していた事実を伝えているのである。

下って、文化元年（1804）刊の山東京伝『近世奇跡考』「歌北丘尼」、

〔残口之記〕に、歌比丘尼、むかしは、脇挾し文匣に巻物入て、地獄の絵説し、血の池のけがれをいませ、不産女の哀を泣する業をし、年籠の戻りに、烏牛王配りて、熊野権現の事触めきたりしが、いつのほどよりか、かくし白粉薄紅つけて、分鬢帽子に帯はゞ広く成し云々。下略。〔東海道名所記〕〔割註〕万治中板本。」云、（中略）かゝれば熊野比丘尼の風、万治の頃はや変りたり。

同じく京伝の『骨董集』（文化11年〈1814〉刊）「勸進比丘尼絵解」、

下にいだせる古画、その風体をもて時代を考ふるに、寛永の比かけるものにて、勸進

比丘尼の絵解する体にぞあるべき。〔東海道名所記〕〔割註〕浅井了意作、万治中印本。」巻二に云、「いつのころか、比丘尼の、伊勢熊野にまうで、(中略)かゝれば、昔の勧進比丘尼は、地獄極楽の絵巻をひらき、人にさしをしへ絵解して、仏法をすゝめたりき。下の古画の体を見るに、寛永の比にいたりてはそれを略し、かの絵巻は手に持て計りにて、比丘(中略)今説経祭文と云ものに、不産女ちごく、血の池ちごくなどとてあるも、絵解きのなごりなるべし。血の池ちごく物語をよむに、〔血盆経〕〔割註〕偽経なるはさらなり。」に、目連、羽州追陽県に到り、血盆池地獄の中に、女人許多種々の罪を受るを見て、悲哀して、獄主と問答の事あるにもとづきて、いともさなく作りたる物ながら、文はおのづからふるめいたる所あればなり。又今地ごく絵を杖の頭にかけて、鈴をならし、地蔵和讃をとなへて、勧進するも、この遺意にやあらん。」

(傍線引用者)

は、共に先行文献を渉猟し、きわめて考証学的に熊野比丘尼の絵解きに言及している。加えて、前者は「熊野比丘尼絵説図」と題する、又後者は「古画勧進比丘尼絵解図」という、絵解きの芸態を示した貴重な図版を各一葉併載するのだった。後者の傍線部に該当する図柄が、他でもない京伝の『四季交加』(寛政10年〈1830〉刊) 7月条の挿図中に見られることを申し添えておく。

これらの資料を整理すると、近世初期には夙くも、時代や社会の趨勢に抗しきれず、本来の芸である〝地獄絵の絵解き〟をほとんど廃してしまった。しかし、歌比丘尼あるいは浮世比丘尼となった後々まで、勧進の証したる文箱(絵箱)と柄杓とを決して離しはしなかったのである。

4

黒川道祐は『日次紀事』延宝4年(1674) 2月条に、

倭俗彼岸中、専作仏事、民間請熊野比丘尼、使説極樂地獄圖、是謂揚畫

と認めている。近世のごく初期、民間にあっては八月の彼岸になると、熊野比丘尼を招き、地獄極楽図を解かしめたようである。無色軒三白『好色訓蒙図彙』(貞享3年〈1686〉刊)、艸田斎『籠耳』(貞享4年〈1687〉刊)は、それぞれ、

むかしをきけば、沙法も手またふして、阿爺もたず、魚くはず、寺参にうとき家美様、談義も説法も耳にとまらぬ女、わらべに、地ごく極楽のゑをかけてゑときしてきかせ、

老の坂のぼればくだる、つねならぬ世の無常をしめして、心なきにもなみだをこぼさせて　（『好色訓蒙図彙』）

くまの比丘尼地獄の射相（ていさう）を𡚁にうつし、かけ物（もの）にして𡚁ときし、女わらへをたらす、かのうまずの地ごく両婦（ふため）ぐるひのぢごくは、たやすく𡚁ときせぬを、女子どもなを聞たがりてしよもふすれば、百廿文の灯明銭をあげられよ、𡚁ときせんといへば、われもわれもと珠数袋のそこをたゝき、銭をだしあわせてきけば、又ぢごく釘の血のぢごくなどゝ云事をいひきかせ、女の気にかゝるやうに𡚁ときして、ひたと銭をとる、これよりぢごくのさたも銭といふ也　（『籠耳』）

の如く、絵解きの芸態を具体的に伝え、絵解きに用いた地獄極楽図の図柄についても述べている。『籠耳』は、室内における絵解き風景を描いた挿図も併載するが、その画中画には、上記の本文に呼応する両婦・不産女・血の池の各地獄が描かれている。前掲『色道大鏡』も含めて、それは、上部に日月、その下の半円に「老の坂のぼればくだる」人間の生涯と樹木の四季の移ろいを、下半部に地獄をはじめとする六道の諸相を描き、さらに、仏菩薩の来迎を図示し、中心部には『華厳経』に説く「観心」の意の「心」字を配した、掛幅形式の図である。後にふれるが、これらは今日、熊野比丘尼にゆかりの新潟県佐渡・旧織田常学院や京都市六道の辻の西福寺・珍皇寺等に伝わる。又、祭礼の場や路傍で絵解きするさまを描いた図も、フリア美術館『住吉神社祭礼図屏風』（元和・寛永〈1615～44〉頃）・『京名所図屏風』等に見られるのである。

しかしながら、西鶴『世間胸算用』巻5の2「才覚軸すだれ」（元禄5年〈1692〉刊）が、

されば熊野びくにが、身の一大事の地ごく極楽の繪圖を拜ませ、又は息の根のつゞくほどはやりうたをうたひ、勸進をすれども腰にさしたる一舛（いつしやう）びしやくに一盃（いつぱい）はもらひかねける

と記載するように、絵解きや歌によって、毎日の運上と定められた勧進柄杓一杯（一升）の米や鳥目百銭を得ることは、彼女たちにとって、決して容易なわざではなかったであろう。

次に列記する資料は、絵解きの芸態に加えて、熊野三山の「年籠り」につ

いても述べている。

昔は脇挾し文匣に巻物入て、地獄の絵説し血の池の穢を忌ませ、不産女の哀を泣する業をし、年籠の戻りに烏牛王配りて、熊野権現の事触めきたりしが、(下略)

(増穂残口『艶道通鑑』)

勸進比丘尼は歌比久尼とも熊野比久尼ともいふ、地獄の繪巻物を昔は持ありきて繪解して婦女輩を勸進したりしが、繪巻物はすたれて一種の歌をうたひ柄杓を持ありくことなり、もと熊野に來りて、かの繪巻物をうけ諸國をありきける由なるが、今は本國には總て此者なし (本居内遠『賤者考』)

往古より衣を着ざる比丘尼の、地獄極楽の経を持ち歩き、老婆婦女などにその昔の絵解して、極楽地獄の有様を物語りて渡世せり。これを絵解比丘尼と唱えしが、後は熊野の牛王を持ち来り、入用の者へ売り、これを熊野比丘尼と云う。この比丘尼買色と変じて、もっぱら身を売ることとなり、その頃唄比丘尼とて、買風なる頭巾を冠り、紅をほどこし、幅広の帯胸高に結び下駄をはき、美敷甲掛けて、左に牛王入し箱を抱え、右にはびんざさらと云うものを指にはめ、これを鳴らして唄を諷い、町々の門へ立ち、手の内を貰う。(中略) 今は衣着ざる比丘尼と言うもの絶えてなし

(水野蘆朝『文盲画話』)

もろもろの比丘尼、仏果ぼたいのためくにくにおくわんじんし、一紙半銭の助成をかうむり、多歳雪霜寒苦をもいとわす三くまのへとしこもりにもふて、香花・燈明・仏供、或は宮こ寺この破烈いたし侍るをしゆりし奉るなり。是熊野比丘尼の宗意也。

(庵逧氏蔵『比丘尼縁起』)

即ち、熊野比丘尼たちは、大晦日から元旦にかけて三山に年籠りをし、諸国勸進のための烏牛玉や護符と共に地獄絵を授けられたのである。

はたして、絵解きの語り口はどのようなものであったろう。中川喜雲『私可多咄』(万治2年〈1659〉刊) の一節に、

むかしくまのびくに繪をかけて、是は子をうまぬ人、死で後とうしみをもちて、竹のねをほる所なりといふをきく、おなご共なみだをながし、さてゑどきすみて後びくににとふやうは、子をうみてもそだゝぬものは、うまずとおなじ事かといへば、比丘尼こたふるは、それはうまずよりすこしつみあさし、さればとうしみはゆるして、たけのねをいがらにてほらするといふたは、よいかげんな事なり、

と、聴衆を意識した口ぶりで、不産女地獄の場面が引き写されている。随分言いかげんな物言いではある。そこで、田宮仲宣『東牖子』(享和3年〈1803〉刊。『橘庵漫筆』とも) 巻3、

仏子方便の寓言は心得侍りぬ。其余に私なること多し。先地獄の図を見るに、焔羅王の不直歟。修文郎の筆の斐か。但し仕送る仏の私の所為にや。剃髪僧形の冥府に堕し、枷責を受し図なし。邂逅不如法無儀愧ニ而斬罪梟首せらるゝも有に、地獄に僧の壱人堕せざるは、仏も私甚うして穢行なきにしもあらず。

のような、地獄絵に対する批判が生ずるのも、当然なことである。

絵解きそのものの口調とは言い難いが、国会図書館蔵板本『道行集』の「びくにぢごくのゑとき」と題する、

そもそもわうしやうごくらくの、くものうてなにのりの花上ぼんれんにうかふ事、此世のこの身このまゝにとりもなおさずじやうぶつす、こしふをんとはとかれたり、かばかりちかきごくらくも、つくりしつみがおにとなり心のつるぎ身をせむる一百三十六ぢごく、むけんけうくはんあびやうちん、此世のいろはあだ花のなさけのなみだながれてもせうねつの火はきへやらずれんりのふすまあたゝかに、ひよくのとこをかさねても、ぐれんのこほりはとけがたし、そもや人げん一人は三ぜのしょぶつくるしみて、つくりたてんとし給ふを、十月にたらでおろしごの、しょぶつ一どにみこゑをあげなげかせ給ふ御なみだながれて、たきつちのぢごく、くはゑんとなつて身をこがす、（中略）是はまたうまずの地ごく、たけのはやしにをとろへてかげもよろよろたよたよとたどり、よろばふあはれさやちすじの、とうしんたぐりもて心のやみにくれたけのたけのねをほるしのだけの、つえにすがりてなくばかり、（下略）

の一文も又、語り口を考える上で大いに参考となろう。

5

次に、絵解きされたか、あるいはそれと覚しき、各地の「地獄絵」（呼称に相違は見られるが、構図はほとんど一致する）その他について少しふれておきたい。これらは、近年実見又は萩原龍夫・徳田和夫・竹林栄一・渡辺昭五の諸氏の教示により、確認し得たものである。

文化11年（1814）12月那珂通博の手に成る『出羽国秋田領風俗問状答』所収「六郡祭事記」正月条は、

十六日　寶性寺曼陀羅參

郭外の寺町にある比丘尼寺なり。この日地獄變相の圖を掛く。女兒群參す。

六郡の寺院、元日より年中の勤行。一宗々々の開山あるは本山の恒規に從ひて、別

に異なる事なし。城主の香花處天德寺の如きは、ことに榮山の清規を守り一事も失はず、常法幢にて夏冬の結制に至るまで怠る事なし些の異るは日を追て出す。

と記述するに留まっている。江戸や京・大阪の大都市では、近世初期既に廃(すた)れてしまった熊野比丘尼の絵解きであったが、これに類する地獄絵の絵解きが、19世紀初頭の、雪深い季節に秋田の宝性寺（現在秋田市大町、真言宗）で執り行われていた。なお、同寺には今もこの地獄絵が伝わっている。我孫子市正泉寺には、『尼御療法性尼生滅之図』１幅と血盆経出現及び血の池地獄を描いた『女人成仏血盆経出現図』２幅がある。北条時頼の女法性尼を開山と伝えているが、庵逧氏蔵『比丘尼縁起』所収時頼妻女に纏わる説話との関連性の有無については、後日あらためて検討することとしたい。

新潟県佐渡博物館寄託・熊野山聖王寺織田常学院旧蔵『十界曼荼羅』は、それぞれの場面に相応する和歌を書き留めた貼札がある。剝げ落ちた札もあり、必ずしも原形そのままではない。しかし、例えば、人間の生涯を描いた例の半円上の中央部には、

老の坂登り登りて跡見ればあとのとふとさ先きのちかさや

の一首が貼られてあり、「地ごく極楽のゑをかけてゑときしてきかせ、老の坂のぼればくだる」という前掲『好色訓蒙図彙』の絵解きのさまと一致する。

和泉式部見地獄変相絵感因果詠和歌

浅ましや剣の技のたわむまで何のこの身のなれるなるらん

の一紙は、その典拠を『金葉和歌集』巻10に求めることが出来るのである。案内図と説話画との要素を併せ持つ『那智参詣曼荼羅』１幅も伝わっている。

京都市西福寺・珍皇寺を含む一帯、松原通り大和大路には、もと薬師町という場所があり、熊野比丘尼が集団で住したという（『人倫訓蒙図彙』等）。西福寺（浄土宗）には、佐渡の織田常学院と同様、『六道図絵』『熊野那智曼荼羅図絵』がセットで現存し、他に『十王図絵』『檀林皇后九相図絵』もあり、毎年８月８日から10日の「六道参り」には絵解きされている。一方、珍皇寺（臨済宗）に伝わる『地獄極楽之図』は、時を同じくして境内の一角にしつ

らえた小屋で人々の展観に供する。

三重県志摩町の熊野家は、かつて熊野行屋坊を本寺とし、妙祐庵と称する比丘尼の家であった。「熊野」という姓が熊野比丘尼の家筋を自ずと語っているといえよう。現存する絵画資料としては、『熊野観心十界曼荼羅』のみである。だが、成立年不詳の『妙祐観世音薩菩ヵ地蔵菩薩之和讃』冒頭部の一節に、

> 帰命頂礼此庵乃由来を深く尋ぬれバ、那智乃御山の流れをバ、汲で此地え跡を垂れ、妙に祐（たすく）とあるからハ、浦々嶋々陸（くが）地まで洩らさで救ふと誓願し、仏乃方を詠れバ、地蔵菩薩と諸ともに、和光同塵ましまして、六環月に動かして、六道乃迷いの衆生をバ、すくひたもふぞありがたき、毎年正盆十六乃其日に至りたもふてハ、極楽地獄の絵をかけて、来りし人ニ絵ときして、導く程ぞ殊勝なり

と謡われている。毎年正月及び盆の16日、妙祐庵に参集した人々を相手に、地獄絵の絵解きが行なわれていたことがわかる。

言うまでもなく、和歌山県下には那智大社をはじめ、速玉大社・補陀落山寺・闘鶏神社等に、『那智参詣曼荼羅』は伝わるが、『地獄絵』はいずれも見当らないようである。

岡山県邑久町の武久家には、幸運にも、『観心十界図』(本図は掛けられない程傷みがひどく、一日も早い修理が望まれる)『那智参詣曼荼羅』『熊野本地絵巻』3巻、宝暦3年（1753）奥付の『邑久郡下笠賀村旧記』並びに牛玉宝印の板木がまとまって残っている。『邑久郡下笠賀村旧記』冒頭に、

> 1 往古より下笠賀村中熊野山と申比丘尼寺株御座候ハ、御公家様方之御姫松葉と申人熊野御信心之志ふかく御発心被成、五人之弟子を御連レ御執行被成、此所江御忍び、熊野権現の霊徳を開キ仏法を進メ、近国御家中又ハ町在御内所近く被入、絵解キ念仏仕候得共、末世ニ至リ聴聞仕候者も無御座候ニ付、歌比丘尼となり勧進修行を渡世ニいたし申候、右御姫松葉と申人之比ハ天文年中之由と承伝候

の如く、天文年中（1532～55）この地で絵解きがなされた旨記されている。「天文年中」の真偽は暫く措き、上記の掛幅や絵解がいずれも絵巻きに供されたのであろう可能性はきわめて強い。岡山県美星町吉田家にも『那智参詣曼

荼羅』があるが、残念ながら改装時に上部が縮められ、日輪・月輪を欠いている。

6

最後に、地獄絵に関する画証資料をまとめてスライドで御覧頂きたい。

1．大津市聖衆来迎寺『六道相絵図』
2．富山県立図書館本『立山曼荼羅』
3．同上―目連救母譚―
4．青森県金木町雲祥寺『十王図』
5．キジルチ仏洞『阿闍世王蘇生図』(8世紀)―釈迦四相図と女人絵解き―
6．『三十二番職人歌合絵巻』―俗人絵解き―
7．山東京伝『四季交加』7月―絵解き法師の「地獄絵」絵解き―
8．那智大社『熊野牛王』
9．熊野本宮『熊野牛王』
10．速玉大社『熊野牛王』
11．フリア美術館『住吉神社祭礼図屏風』―熊野比丘尼の絵解き―
12．艸田斎『籠耳』―熊野比丘尼の絵解き―
13．山東京伝『近世奇跡考』―「熊野比丘尼絵説図」―
14．山東京伝『骨董集』―「古画勧進比丘尼絵解図」―
15．舟木家本『洛中洛外図』―街頭の比丘尼―
16．インド西北・ラダク地方ティクセ寺勤行堂入口『六道輪廻図』
17．京都市西福寺『六道図絵』
18．京都市珍皇寺『地獄極楽之図』
19．岡山県美星町吉田氏『那智参詣曼荼羅』
20．我孫子市正泉寺『女人成仏血盆経出現図』

以上、わずかな例証をあげ、基礎的かつ雑駁な報告で終止したが、今まで眺めてきたような、地獄語りの絵解きという特異な文芸・芸能が、かつて全国各地に存在した。しかしながら、現状は、文献・画証資料共に、散佚ある

いは破損等の危機に瀕していると言ってよかろう。従って、今後、各地に散在する地獄に関する説話画を堀り起こす作業と同時に、「地獄語りの文芸」という視点に立って、一連の作品を捉えていきたいと考える。

討議要旨

徳田和夫氏より、熊野比丘尼だけが地獄絵を解いて廻ったのではなく、もっと広い範囲で解かれたのではないか、他の唱導の遊芸者、遊行人たちと地獄絵との関わり方をも少し述べて欲しいとの感想があり、発表者から、立山曼荼羅等の例をあげて、熊野比丘尼以外の地獄絵解きについて説明があった。

松井朔子氏より、熊野比丘尼の熊野と能の「熊野」との関係はどうかとの質問があり、徳田氏より、おそらく関係がないだろうとの返答があった。